

CURES

NEWSLETTER

地域経済
ニュースレター

1993.11.25 No.29

巻頭言

『満足の文化』と米騒動

市原 あかね

日本の政治の枠組みが大きく変わった今年、戦後高い生産力を形成してきた稲作は未曾有の大凶作となった。この政変で新しく雛段におさまった政治家たちは、「殿さま」に象徴されるような都会的な洗練や、社会の豊かさと文化を体現し享受する階層、育ちの良さを感じさせる階層の雰囲気をおしだした。これは、敗れた自民党が農村との臍帯を強く感じさせるのと対象的だ。そして作況指数75（実際にはこれを下まわると言われている）、収穫皆無の地域も発生するほどの農業の危機をむかえた。この新しい政権は、税制の改革や規制緩和の議論を進めているが再度の米自

由化反対国会決議には応じなかった。12月のウルグアイ・ラウンド妥結に際しては、オレンジや牛肉と同様、秘密里に関税化を受け入れるのではないかと危ぶむ声もある。一方、米の大不作を目にしながらマスコミの論調も昨年とは大きく変わって米自由化に傾いている。

この秋翻訳が出版されたガルブレイスの『満足の文化』は、レーガン政権、サッチャー政権を生み出した背景を「満足の文化」と特徴づけ、またそれを支えた社会階層を、強い自己満足と自己肯定の感情にひたった豊かな人々であるとする。この階層は選挙

- 巻頭言市原 あかね
- CURES Report
「市場経済化過程のイルクーツク」海野 八尋
- CURES Salon
「MRS THATCHER: A CAPTAIN WHO DROWNED」John G. Gibson
- Topic
「雑感 - 教養部の講義を終えて -」中島 健二
- 地域経済文献情報

において満ち足りた多数派を形成し、既得権益を守りつつ自由放任を支持し、所得格差を許容し、長期的な視点をもたず、社会を傷つけていく傾向をもっている。これに仕える経済学が、アダム・スミスを曲解し利用することで箔をつけ、政府介入の制限、限りなく自由に富を追求し所有することの正当性、貧しい人々に対する責任感の低下を支持したという。そしてバブル経済以降の日本に向けて、危機を深めるアメリカと同じ方向へ進もうとしていると警告を発している。

政権交代は、これまでの官僚、財界、政界の構造にゆらぎを与え見応えのあるドラマを提供しているが、また日本の保守が、旧来の農村に依拠したものから都市に依拠したものに組替えられたことも示しているようだ。家を買えないとか通勤地獄であるとか、豊かさが実感できないと言いながらも、80年代後半以降形成されてきた都市の相対的に豊かな階層、中流意識をもった階層の中に保守的な気分、ガルブレイスの「満足の文化」が成立していて、そこを基盤にする政権へのシフトが起こったと思われる。

もっともこの階層が一様に「満足の文化」にひたっているわけではない。豊かさゆえの責任を、地域の実践や国際的な活動を通じて果たそうとしてきた人々の存在も指摘しなくてはなるまい。高学歴の女性たちはリサイクル運動やボランティア、生活の見直しや農村との交流を含む生協活動などの担い手となっている。しかしこの階層の総体的な性格をみた場合には、品質と価格を享受する消費者としての自己規定や、地域とのつながりを失い抽象的な存在となってしまった都会人としての側面も否定できない。これほどの凶作を経験しながら、米問題の今後について農村や農業の現実を踏まえた論議に進めないのは、こうした側面によるのではなからうか。

日本が米を輸入することは国際的影響力をもつが、実はそれ以前に世界有数の穀物輸入

国であることの影響も大きい。アフリカ諸国などの食糧自給が困難な国々は、先進国にとっての“飼料”が彼らにとっては“食糧”であり安易な穀物輸入によって価格を上昇させないよう訴えてきた。また今後途上国の人口増加と経済発展によって穀物需要が大きく増大すると予想され、来世紀初頭から半ばの間に、逼迫を乗り越えて深刻な食糧不足が生じると考えられている。その時代に向かって、日本はなおも金に飽かせて世界中から食べ物を買いきり続けるのだろうか。

中長期的な国際食糧問題の課題は、途上国の国々が自国で生産した農産物を消費できるようにし、そのことを通じて途上国経済の立て直しと貧困-環境破壊の悪循環を断つことだろう。また、今後も続く(悪化する可能性のある)地球温暖化・異常気象を考慮して、国際的な需給調整が必要となるかも知れない。しかしその調整は食糧生産能力のある国が窮地にある国をいかに支えるかという仕組みであって、これまでのような多国籍企業や農産物過剰国の財政負担と消費者の都合を中心にしたものではない。

日本の満ち足りた階層は、アメリカやヨーロッパのそれとともに、世界の満ち足りた階層を形成することになった。この階層は、ガルブレイスの言うような、国内社会に危機を引き起こし環境問題などの長期的問題にも対処できない「満足の文化」の人々で終わるのだろうか。その場合には、地球的規模での危機を乗り越えることは不可能だろう。それとも、より理性的に責任を負える階層へと成熟していくのだろうか。ガルブレイスはこの可能性に否定的だが、都市に足場をもちながら農村との交流や国際的な活動にも参加する人々の成立も事実だ。抽象的な都会人にも、具体的な農業や地域、世界の貧困に出会う場がどこかに開かれてあるらしい。

(金沢大学経済学部助教授)